

伊藤孝継『南洲翁遺訓』

聖人ノ道ハ是ヲ設クルモノニ非ズ、天地自然ノ理ナリ。此ノ天理ヲ明カニセザレバ、則チ禽獸ト云フモ可ナリ。凡ソ人間ニ生レテハ、此ノ道ヲ明カニ我物トスレバ則チ聖人ナリ。聖人ハ神ニモ非ズ佛ニモ非ズ人間ナリ。天理ハ孝悌忠信ノ外ナシ、五倫ト云フモ皆ナ今日、人間交際ノコトナリ。此ノ道ヲ明カニスルハ學問ナリ。學問ハ見様一ツニアリテ、學問ニセズシテ、我ガ物ニスルガ第一ナリ。是レヲ我ガ物トスルニハ、是非誠一枚ニナラザレバ能ハズ。誠一枚ニナリテ天理ヲ我ガ物トシ、益々研究シテ、聖人トナルノ志、寐テモ起テモ意中ニ考フレバ、随テ假初ノ夢ヲ見ズ、是レヲ以テ誠一枚ニナルナラザルノ證トスベシ。外ニ我ガ證トスベキモノナシ。誠一枚ニヨリ君ニ事フレバ忠トナリ、親ニ事フレバ孝トナリ、朋友ニ交レバ信トナリ、何事モ誠一枚ガ根本ナリ。蹈ムト云フコトモ目前ノコトニテ我ガ物トセシニ非ズ、天理ヲ見テ逃ルルハ、敵ヲ見テ白刃ヲ避ルモ同ジコトト思フベシ。初節中節迄ハ大抵ユクケレドモ、最モ難キ処ハ晩節ナリ。是レ道ノ愈々廣クナル所以ナリ。人ヲ見ルニモ、晩節ヲ以テ見ルベシ。

程子曰、人於夢寐之間、亦可以ト自己ノ所學之深淺、

如夢寐顛倒、便是心志不定操存不固。

沈文憲曰、晝觀妻子、夜卜諸夢寐、兩無所愧、然後可以言學。

誠一枚ニナリテ道ヲ磨クニハ、学問ノ外ナシ、聖賢ノ書ヲ見テ、我ガ力ニ及バズト云フコトナシ。学問ト云フハ書ヲ読ムバカリデハナシ、今日朝夕親ニ事ヘ、朋友ニ交ル有様、我ガ誠心ヨリ出ルヤ否ヤ、篤ト注意シテ聖賢、書ヲ見ズンバ、決シテ研究ニハナラズ。学問ノ見様ハ何レヨリ虚ニ至リ、何レヨリ誠ニ至ルト、根本ヲ能ク分析スルハ第一ナリ。書ヲ見ルモ必ず倦ムモノナレバ、閑坐シテ愈々分析スベシ。人ヨリ毀シラレレバ怒リ、譽メラレレバ喜ブ者ハ志ノ未ダ立タザルナリ。毀リヲ怒ル者ハ譽レヲ喜ブ者ナリ、皆ナ己ヲ愛スル私情ヨリ起ルナリ。誠心一本ノ者ハ一身ノ毀譽ニハ関セズ、国家ノ恥辱ニハ怒ルナリ。志ノ立ツル以上ハ鷄ノ卵ヲ抱キ、猫ノ鼠ヲ狙フガ如キモノナリ。此ノ二者ハ決シテ外物ノ爲メ冠ヲ振ハズ、誠一枚ニナレバナリ。志立テバ義トナリ、志立タザレバ利トナリ、志立テバ如何ナル艱難ニ逢フモ、艱難ニ処スルダケニテ何モナシ。皆ナ欲ヨリ道ヲ枉グルナリ、欲ヲ絶テバ即チ誠ナリ、絶タザレバ必ず外物ノ爲メニ動カサルモノナリ。智仁勇ト云フモ、跡ヨリ付ケタルコトニシテ、本ハ必ず至誠ヨリナルナリ。朱子ノ説ニハ柔ナル者ニハ剛ヲ加ヘ、剛ナル者ニハ柔ヲ加ヘト云フ、然レドモ、柔ハ柔ニテ誠心ヲ尽シ、剛ハ剛ニテ誠心ヲ尽シテ善シ。朱子ノ説ニテハ拵ヘ物トナルナリ。

以上、伊藤孝繼氏先生ニ謁シ拝受セシ訓話ノ退テ筆録セシ者也。

註 明治八年十二月、伊藤孝繼（吉太郎、のち忠宝の近習）が鹿児島に西郷を訪う。このとき伴兼之、榊原政治を伴った。（本文は犬塚一貞の『風味録』に依った）